



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「会社員」、あるいは「近代小説」のリミット：伊井直行「星の見える夜」とその周辺
Author(s)	川崎, 俊
Citation	層：映像と表現, 11, 69-87
Issue Date	2019-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/88025
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73517
Type	departmental bulletin paper
File Information	kaishain.pdf



「会社員」、あるいは「近代小説」のリミット

——伊井直行「星の見えるない夜」とその周辺

川崎 俊

はじめに

伊井直行は、一九八八年から一九九一年にかけて、独身の男性会社員を主な登場人物とする小説をいくつか書いている。これらのうち、「さして重要でない一日」(『群像』一九八九・四)と「星の見えるない夜」(『群像』一九九一・二)は、後年、伊井自身による論考「会社員小説をめぐる」(『群像』二〇一〇・七・二〇・一一・一二)、単行本は『会社員とは何者か?——会社員小説をめぐる』(講談社・二〇一二)以下、『会社員小説をめぐる』において、「会社員小説」という「サブジャンル」に属するものとされている¹⁾。

「会社員小説」とは何か。そもそも、なぜ伊井は、「会社員」に着目するのか。その着想は、『会社員小説をめぐる』において、伊井自身の大学卒業時の就職難や、会社員生活の経験に由来すると説明されている。伊井は群像新人文学賞を受賞した年(一九八三年)に、勤めていた京都市内の出版社を辞めている。その後、所謂フリーターとして生活した時期に、自身の会社員経験を捉え直していた。同時期には、従来の日本の企業社会や労働形態への否定的な言説が浮上し、それらに対する認識の変化が生じている。この状況も、「会社員小説」を書くことへ伊井を向かわせた一因と推測できる²⁾。

ただし、最も重要なのは、「八〇年代後半以降、私の小説に

会社員がよく登場するのは、単に登場人物の職業としてではなく、会社員という存在が本来的に物語の枠外にあり、小説の形では描出困難であることを指し示したことからだった」と伊井が振り返っているように³、小説表現の限界を目指す試みとして『会社員小説』が位置づけられていたことである。後年、『会社員小説』は、源氏鶏太等の「サラリーマン小説」や、城山三郎等の「企業小説」「経済小説」とは異なるものとして、以下のように定義されている。

それは、単に会社を舞台とし、会社員が主要な人物として登場する小説ではなく、主要な登場人物として会社員が存在が不可欠の小説である。つまり、作品の舞台となるのは主に会社であるものの、仕事の内容は必須の要素ではない。純文学やエンタテイメントといったジャンルの別を問題としないが、登場人物の会社員は、単なる情報提供者やストーリーへの奉仕者であってはならない。

（『会社員小説をめぐって』九一頁）

このように位置づけられているにも拘わらず、伊井の「会社員小説」（論）を本格的に論じた文章は、今日に至るまで皆無である。それはおそらく、多くの場合、「あまりに身近すぎて

かえって『見えない人間』になってきた」、「会社員という存在」を掘り下げた小説（川本三郎）、といった理解の範疇に留まるためである⁴。だが、このような理解は充分なものではない。本稿で明らかにするが、このように理解する限りでは、伊井が「会社員小説」論で否定的にとらえる「サラリーマン（小説）」との区別ができないからだ。

本稿は、平成期初頭の「会社員小説（論）」の核心に迫ることを目的とする。以下に概要を示す。まず、「星の見えない夜」の発表直後に「会社員小説」論の基となる文章が発表されたことに着目し、論考と小説それぞれの内容を確認する。それを踏まえた上で、「会社員小説」（論）に通底する「会社」の捉え方そして、「星の見えない夜」の、批評性と限界とを析出する。

一 「近代小説」からの切斷

本節および次節では、平成期初頭に書かれた「会社員」に関する伊井の文章で、二つの時期が重視されていることを指摘する。そこから、「会社員小説」論を理解するための手がかりを得たい。

まず、「近代小説」の出現時期である。伊井の「会社および会社員の起源と近代小説」（『文芸』一九九一・秋季号）という

文章の一部を以下に引用する。

考えてみよう。通勤に二時間かけ、十時間働く会社員の「人間性」が、会社の外にセーブされるとしたら、彼は、どのような人間だろうか。あるいは、その会社員の「内面」とは、どのようなものか。近代小説は、同時期に生まれた会社や会社員の存在を排除した空間に成立している。「小説」は、会社や会社員の存在から、人々（会社員を含む）の目を逸らし続けるのに貢献して来た。その間に、「会社」は、社会全体を覆いつくし（当然、小説の描きうる範囲は減少する）、一九八〇年代には、自身がその中で成長した近代国家の枠組みをも踏み越えた（「^{ブランド}会社の紋章」をかかげて）。この過程で、近代の次の時代を生きようとする会社にとって、近代小説は不要のものになったのだ。

右の引用よりも前の箇所では、『「内面」』や主体性の表現の確立、という「近代文学」の制度性を指摘した、柄谷行人『日本近代文学の起源』（講談社・一九八〇）の内容に言及がある。引用箇所の『「内面」』の語はそれを受けたものだ。柄谷自身が述べたように、『日本近代文学の起源』は、「近代国家」（『国

民国家）において個人の主体性の確立に寄与してきた「近代文学」（『小説』）がその役割を終えたとする認識のもとで書かれている。「会社および会社員の起源と近代小説」における「近代小説」観も、柄谷のものにある程度則つていると読める。しかし、「近代小説」のはじまりから「会社」と個人との関係が「排除」されていることを強調する伊井の論点は、柄谷のそれと大きく異なる。ただ、「会社および会社員の起源と近代小説」の時点では、「会社」や「会社員」を論じる重要性について、十分な論証が示されているわけではない。そのため、後年の伊井は、「会社」の成立を、国民国家や「近代小説」のそれと同時期にあるものとして積極的に位置づけている。

伊井の評論『岩崎彌太郎——「会社」の創造』（講談社新書・二〇一〇、以下『岩崎彌太郎』）および『会社員小説をめぐって』では、岩崎の手による三川—三菱商会の設立（一八七二—一八七三年頃）が、日本における「会社」の誕生とされるここでは、例えば澁澤栄一や福沢諭吉が、「会社」を「商人の共同」としてしか認識していなかったと指摘される（『岩崎彌太郎』）。それに対して、岩崎の「会社」が、江戸時代までの封建的な身分制度を解体して生まれた、個人の能力を活かす集団であった、と伊井は強調する。そして、「会社」という言葉に本来営利のニュアンスが無かったことを踏まえて、「日本近代

の始まりにおいて、『会社』という自発的な人々の集合・共同は、まず利益の追求のための組織として顕著な形で現れたのである」（『会社員小説をめぐって』二二七頁）とされる。ここでは、従来指摘されてきた、三川―三菱商会の「独裁」的体制は、個人の集合をまとめるために要請されたと見なされる。

何より、三川―三菱商会の成立は、『日本近代文学の起源』において「近代文学」の成立期とされていた明治二〇年代（一八八七―一八九六年）、そして、天皇を元首とする大日本帝国憲法の発布（一八八九年）より以前である。そして伊井は、公務員を、本来「国と天皇が奉ずべき対象」（『会社員小説をめぐって』二三三頁）であり、江戸時代までの主従関係の延長線上にあるものとして、「会社員」と差別化する。つまり、「会社」は、国民ないしは臣民であることは異なる個人主義の場として始まった、ということだ。このような主張を、一連の「会社員小説」論からは読み取れる。

そして、『会社員小説をめぐって』では、「会社」を「公」と呼びつつ、「ここでの『公』という言葉は、『公務員』の『公』とは違う。会社というかりそめの『公』である」（『会社員小説をめぐって』二〇五頁）とされている。本書において、「会社」はしばしば、「特有のルールが適用される」ような「ゲームの空間」、あるいは「閉域」等と呼ばれる。そして、公共は一般

的に、「会社」のような共同性の外部に想定される⁷。以上を踏まえると、「かりそめの『公』」としての「会社」とは、個人主義の場であると同時にその外部の公共空間を抑圧する、開かれつつ閉ざされたもの、となる。つまり、「かりそめの『公』」とは、個人と公共との中間領域を意味する。

「会社および会社員の起源と近代小説」の主張をまとめると、「近代小説」において、個人と国民国家との関係に先立ち、個人と「会社」との関係を考える必要性があった、となる伊井の「会社員」は、職業や労働者を意味するというよりも、近代以降の資本主義社会に登場した、「会社」との関係によって成立する個人のあり方を特徴付けるための用語となっている。

二 「サラリーマン」からの切断

もう一つの時期は第二次世界大戦後である。伊井は「会社員」を論じる一方で、「サラリーマン」という言葉に対し一貫して否定的な態度をとる。例えば、「さして重要でない一日」の執筆直後から伊井はすでに、「サラリーマン」を、「ほとんど定義ができないいいかげんな言葉」としている。「星の見えない夜」とほぼ同時期に発表された、「サラリーマンとは誰のことか」（『群像』一九九一・五）という文章で、「サラリーマ

ン」という言葉の問題点について、最初の具体的な指摘がなされている。ここでは、職種（ホワイトカラー＝頭脳労働者）と給与形態（俸給制）という異なる二つのカテゴリを混同した、「サラリーマン」（給与労働者）という和製英語の使用法、および、経済面から「全勤労働者の平均」を指すそのニュアンスと実態との乖離が挙げられている。『会社員小説をめぐって』においても、ほぼ同名の『サラリーマン』とは誰のことか（『現代』一九九四・九）という伊井自身の文章が引かれ、同内容の指摘が反復されている。

「サラリーマン」という言葉が伊井の指摘するニュアンスを持つに至ったのは、第二次世界大戦後である。「サラリーマンとは誰のことか」では、このことは明記されていないが、後年、伊井は次のように書いている。ここでは、第二次世界大戦後の日本社会の特徴と、「サラリーマン」の語のニュアンスの変化との関連が意識されている。

そもそも戦後の日本社会は平等を旨とし、「等しからざること」についてはできるだけ触れまいとする傾向があった。それを「偽善」と取るか、「優しさ」であるとみるか、議論の余地があるだろうが。また、長く続く経済的上昇気流に乗っていた「日本株式会社」の中では、日本国民

の多くが、同じ運命共同体の一員であるという暗黙の了解があったか、あるように信じてこられた。少なくとも、「サラリーマン」「平凡なサラリーマン」と自認することのできる人々の間では。そして、そのように自認することは、「日本株式会社」への帰属意識の告白でもあっただろう。同じ共同体の中には、「働き蜂」勤労者の運んでくる蜜を横取りすべく、天下りや利権の構造を強固に築きあげていった「真のエリート」たちも住まっていたわけだが。（『会社員小説をめぐって』三六頁）

この引用箇所は、いくつかの前提に基づいて書かれている。それをおさえるため、まず、企業社会としての「戦後の日本社会」に関する言説をごく簡単に確認しておこう。

第二次世界大戦後の日本は、重工業を軸とする産業構造に転換したことで、肉体労働者の正規雇用が増加し、ブルーカラー（肉体労働者）とホワイトカラー間の待遇格差の解消が進行した。これは、朝鮮戦争（一九五〇年）による特需や都市部の人口増加等と共に、一九五〇年代以降の高度経済成長の要因の一つとされる。「サラリーマン」のニュアンスは、このような状況と連動して「平均的な日本人」を指すものへと変化し、そのまま定着した。源氏鶏太等の手による「サラリーマン小説」も、

一九五〇年代に多く登場する⁹。

また、高度経済成長期以降、注目を集めたのは、年功序列制や終身雇用制、企業別組合等の特徴を持つ、「日本的経営」と呼ばれる仕組みだった。ジェイムズ・アベグレン『日本の経営』（占部都美監訳、ダイヤモンド社・一九五八）の紹介を嚆矢として、ロベール・ギラン『第三の大国・日本』（井上勇訳、朝日新聞社・一九六九）、エズラ・ヴォーゲル『ジャパン・アズ・ナンバーワン——アメリカへの教訓』（広中和歌子、木本彰子訳、TBSブリタニカ・一九七九）、チャーマーズ・ジョーンソン『通産省と日本の奇跡』（矢野俊比古訳、TBSブリタニカ・一九八二）に至るまで、諸外国からの評価を逆輸入しつつ、「日本的経営」を肯定的に評価する文脈が形成される。村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎『文明としてのイエ社会』（中央公論社・一九七九）のように、「日本的経営」の原型を、日本的伝統としてのイエ制度に求めたものも、そこに連なる。この文脈に対して批判的な言説が顕著に生産されるのは、前述の通り、一九八〇年代以降である¹⁰。

以上の前提をおさえて、引用箇所に戻ろう。そうするとここでは、「日本株式会社」としての「戦後の日本社会」は、「日本的経営」という言葉に象徴される、官民が合体した「運命共同体」として捉えられてきた、と指摘されていることが解る。こ

のように、「会社」の仕組みと国家とを一体化したものの（Ⅱ）「日本的経営」あるいは「日本株式会社」と捉えたり、あるいは官民の合一化した総力戦体制の延長線上に第二次世界大戦後の社会を置くような見方をすれば¹¹、個人が個々の「会社」に所属することの固有性は見過ごされるだろう。

そして、「サラリーマン」を「自認する」ことは、『日本株式会社』への帰属意識の告白でもあった¹²とされる。第二次世界大戦後の「日本株式会社」で、「平凡」な「日本国民」を意味するようになった「サラリーマン」という言葉は、個人と「会社」との関係性を抑圧している¹³。これらの箇所から、伊井の「サラリーマン」批判が、個人と「会社」／個人と国家、それぞれの関係を混乱させることから距離を取る意図のもと行われていると理解できよう。

前節および本節の議論をまとめよう。「会社員小説」と同時期に発表された伊井の文章から、「会社員小説」（論）の問題意識が一定程度まで理解できる。その内容は、

（１）「近代小説」が、国家と個人との関係を重視して展開し、「会社員」という個人のあり方を無視してきたこと

（２）第二次世界大戦以降、「サラリーマン」という言葉

が、個人が個々の「会社」に属しているという見方を覆い隠してきたこと

この二つである。いずれも、「会社」への所属による近代的個人の成立が「近代小説」において不可視化されてきたことへの指摘である。この主張は、後年の「会社員小説」論に引き継がれ、議論の土台を成している。

要するに、伊井の「会社員小説」論は、個人と国家との関係に、その中間項として「会社」を加え、「近代小説」の前提を変形する試みである。

三 「会社員」というアポリアの発見

しかし、前節までの議論のみでは、伊井の「会社」あるいは「会社員」概念の独自性を示すにはまだ充分ではない。「近代小説」における「会社」の不可視化それ自体の理由説明も不足している。ただ、ここまでの議論を踏まえると、「星の見えない夜」が、「サラリーマン（小説）」に対する批判的視座を前提しつつ、「会社員」を無視してきた「近代小説」への違和を表明する契機となった作品だと判る。そうすると、「星の見えない夜」を分析することで、はじめて「会社員小説」（論）を理

解できると考えられる。本節以降は、主にこの小説に対して検討を加えていく。

分析の前提として、全四章からなる小説の梗概を以下に示す。地方から上京し東京の教育関係の出版社に勤める、二八歳の独身男性会社員のシン（シンデン）の約二ヶ月間の生活を中心にして展開する。小説はシンが車を運転しながら泣いている場面から始まる。シンは、会社の経理部に半年間勤務していた派遣社員のひろをデートに誘ったが、当日に約束をキャンセルされて振られていたのだった。一方職場では、課長のナカガワが肝臓の病気で急遽入院したため、シンは部長に頼まれて子ども向けの『ぼうけん絵本』の作成を一人で行う。ひろの送別会にシンは参加しなかったが、当日、会社の建物から出る直前のひろと出くわし、あいさつを交わす（第一章）。

M大学病院に入院したナカガワを見舞う道中、シンは、彼自身が「気力の死」と呼ぶ状態に陥り、アクシデントもあって、病室にたどり着けないまま帰ってきてしまう。別の日にシンは高校以来の友人であるタイジに誘われて、タイジの知人とのテニスの試合に参加するが、ここでもいざこざが起きる。その後再びナカガワを見舞うために病院に行くが、彼の妻に会っただけで帰ってきてしまう。会社には、『ぼうけん絵本』の仕事を手伝う新しいアルバイトのみなみがやってきた。しかし仕事上

でのやり取りから、シンはみなみに苦手意識を持つ。シンは後輩のいずみに、もっとみなみに気を遣うよう注意される(第二章)。

シンはみなみと二人で話してみると、会話がはずむことに気付く。シンは、三度目の見舞いでようやくナカガワに会えたが、鬱になったナカガワは退職する決意を固めていた。シンはナカガワから預かった辞表を持ってあまし、ナカガワの同期で友人でもあるという部長にそれを預ける。一方タイジは、地元に戻った恋人に婚約破棄され、一緒にテニスをした女性と仲良くなっていた(第三章)。

『ぼうけん絵本』は十一月二十九日に校了した。これを以てみなみは会社を去ることになり、送別会が開かれる。みなみはシンの食事仲間のカタノと親しくなっていた。ナカガワの十二月限りでの退職も決定する。ある日シンは、シンがナカガワに辞表を書かせたという噂が社内で広がっている、と同僚のキダから聞かされる。シンとキダの二人が、会議室でいずみを待っているところで小説は終わる(第四章)。

先行する「さして重要でない一日」では、「会社」の業務内容自体は曖昧なままにされていた。それよりも、フランツ・カフカやトマス・ピンチョンの小説等との間テクスト性に由来する¹³、メタフォリカルな読解を誘う記述が目立つ。しかし、梗

概からも判るように、「星の见えない夜」は、そのような表現から遠ざかり、より具体的な業務と生活の記述が導入されている。『会社員小説をめぐって』においても「会社での業務内容が、小説の骨格においても細部においても必要であるものを書こうとしていた」(一八一頁)とされている。この点が二つの小説の明確な違いである。ここから、「星の见えない夜」で目指されていたことを考えたい。

まず、当然だが、それぞれの「会社」により業務やノウハウが異なるため、個々の「会社員」は、所属する各々の「会社」の具体的な様相や業務によってのみ書かれ得る。前節の議論と繋げるならば、「サラリーマン」という言葉で労働者を括るところとは、そのような各「会社」間の差異を無視している。「星の见えない夜」には、登場人物たちが、慣れない建物(出版社と大学病院)の中で迷う箇所がある。それは、単に彼らが部外者だから、と単純な説明で片付けることも可能だが、それを逆にいえば、この小説の「会社員」たちは、それぞれの建物の構造に慣れ、各組織のシステムを内面化している、といえる。

伊井は、一九九六年に行われた加藤弘一との対談で、以下のように述べている。

「……」小説には書きうる限界がある、という話です。それ

も、近代の代表的な文学形式である小説が、もつとも近代的な存在である「会社員」を描くことができないという大いなる不自由についての話です。……」

べつの言い方をする、小説は小説に書ける題材を相手にするものだという当り前のことですね。会社員というのは上半身が会社にとけこんでしまっていて、全体像を書こうとすると、会社の仕事そのものを書かなければならないんです。そんなものを読んでもおもしろいわけがない。無理におもしろくしようとすると、日経のビジネス小説になります。そういうことが経験的にわかったんです。まことに残念ながら¹⁴。

対応関係への直接的な言及は無いが、この引用箇所を読めば、「会社から出たり入ったりすることで、会社の内と外が曖昧になってしまおう作り」（同対談）を意図した「星の見えない夜」の執筆を通じて、伊井が、小説のアポリアとしての「会社員」に突き当たったことは明白だ。あるいは次のようにも言えるだろう。この問題を抜きに、労働者の「内面」らしきものを掘り下げたところで、従来の「近代小説」ないしは「サラリーマン小説」等をなぞり直すに過ぎない、と。

ただ、「全体像を書こうとすると、会社の仕事そのものを書

かなければならない」という特徴は、「会社員」に限らないとも思える。すでに確認したように、伊井は後年の論考で、「会社員」と公務員とを区別していた。しかし、引用箇所における「会社員」の特徴が、組織一般に通じるならば、例えば役所で働く公務員を書いたところで変わらないのではないか、という疑問は否応なく湧いてくる。

ここで重要なのは、やはり「会社員」が「会社」に根ざした存在だということだ。例えば、「星の見えない夜」では、シンにせよタイジにせよ、高校卒業までを過ごした地元を離れ、東京に住んで仕事をしている。しかしそれは、東京という行政組織のためではない。彼らは「会社」に根ざした「会社員」として仕事をする。「会社員」を「会社員」たらしめるのは、「会社」以外にあり得ない。つまり、「会社員」を書くには、「会社」を書くことがその必須条件となる。逆に言えば、「会社」が「会社員」によって構成される以上、「会社」は、具体的な業務を行う「会社員」を通じてのみ書くことができる。先の、「全体像を書こうとすると、会社の仕事そのものを書かなければならない」という伊井の言葉は、このように理解する必要がある。

要するに、「星の見えない夜」における仕事の記述の導入は、「会社」と「会社員」との関係を取り出すためのものであった。「星の見えない夜」では、「会社員」を書くことが、そのまま業

務と組織を書くことに繋がっている。

四 「会社」が「人間」である

「さして重要でない一日」では、「かりそめの『公』」「閉域」としての「会社」が強調される一方、ホームレスや養護学校の生徒と「会社員」との間で起こるトラブル、あるいは社内の制度化されていない「配達組織」を通じて、「会社」という「閉域」と、その外部としての国家や公共等との緊張した関係が示されていた。一方、「星の见えない夜」では、「会社員」が、「会社員小説」論において「公私」と呼ばれる二つの領域に取り込まれている状況が示される。

例えば、シンがベッドから出て、「冬のボーナスでコードレスホンを買おうと思いつながら受話器を取」る箇所がある。「会社員小説」論の用語に則って説明すると、「コードレスホンを買」えば、ベッドの中に居ながらにして電話を取れるため、「会社」「公」の領域が、一層、プライベート「私」の領域に入り込む（逆もまた然りである）ことを意味している。電話網自体は、そのような「公私」の二項対立から成る領域にとらわれないものとも繋がっているはずだ。しかし、「星の见えない夜」では、社内での恋愛や友人関係、休日に行われるナカガワ

への見舞い、あるいは「会社」の人間関係の問題に起因する不眠の症状等の記述により、「会社員」の在り方が「公私」という二項対立によって構成される領域に回収されているように書かれる。そのため、例えば、電話が「会社員」の「公私」を離れた領域に繋がっていることが捉えにくくなっている。

「星の见えない夜」の特徴は、ある意味で、後年の伊井自身による論考よりもラディカルな問題を示す。『岩崎彌太郎』と『会社員小説をめぐる』では、「会社」が、「自らの意思で集まった成員による営利を目的とする組織」（『会社員小説をめぐる』二二七頁）とされ、本来「自発的な人々の集合・共同」であることが強調されていた。「会社員」の「意思」とは、自身の目的と「会社」のそれとを一致させたものと考えられる。「会社員」は、その「意思」に従う限りで「会社員」である。しかしこの小説では、先に列挙したように、「会社」の業務がそうでないかの区分が曖昧な出来事が頻出する。そのため、「会社員」の「意思」や行動も、個人のものか「会社」のものか、明確な区別は不可能となる。『会社員小説をめぐる』では、「公私の分断」された「半身」づつの存在、あるいは、「会社」の「子機」として、「会社員」の在り方が説明される。これらの説明も、「星の见えない夜」の一連の特徴を念頭に置けば、「会社」に取り込まれた「会社員」を意味するものとして

読めるだろう。

「会社員」であることが「会社」であることに繋がる「星の見える夜」からは、本稿でまとめた「会社員小説」論の内容から、一歩進んだ問題を読み取ることができる。それは、単に「会社員」に主体性がないことを意味しない。つまりはこうだ。実は、「会社」こそが「意思」を持つ近代的「人間」であり、「会社員」はその切片である。「会社」が「人間」なのだ。この「会社」＝「人間」という認識こそが、「近代小説」の陥穽であり、伊井の「会社員小説」（論）の理解に不可欠なものとされているのではないか。この観点からすると、国家と個人との関係の問題にし続けてきた「近代小説」において、近代的「人間」としての「会社」と「会社員」の不可視化が起きたのは必然だったといえる。

五 「サーガなき」サーガとしての「会社員小説」

本節では、「会社員小説」を、ここまでの議論と異なる問題系から捉え直すことを通じて、「会社」＝「人間」という認識を、より明確に特徴づけたい。そのため、まず、伊井の「会社員小説」と、ガブリエル・ガルシア＝マルケスや中上健次等、伊井に先行する作家の、「サーガ」（神話）と呼ばれる二〇世紀小説

との関係を確認する作業へと迂回する。

「そして重要でない一日」の発表直後に行われた川村湊との対談で、伊井は、しばしば「マジックリアリズム」と呼ばれるガルシア＝マルケスの方法に言及しつつ、『ビジネス社会』の現実」を書くためには「確固とした批評的な視点がないと駄目なんじゃないかとも思います」と述べていた¹⁵。伊井のデビュー作、「草のかんむり」（『群像』一九八三・六）が、ガルシア＝マルケスの長編小説「百年の孤独」を換骨奪胎していたように、その創作活動において、ガルシア＝マルケスの小説から受けた影響は少なくない。その後も伊井は、「悲しみの航海」（『群像』一九八六・七）や、『濁った激流にかかる橋』（講談社・二〇〇〇）等、「百年の孤独」を下敷きとした作品を繰り返し発表している¹⁶。

ただし、いずれの作品に登場するコミュニティも、「百年の孤独」の舞台となる村・マコンドとは異なり、ゲゼルシャフト（利益社会）であることを所与の前提とする。伊井自身、瀬戸内海に面する寂れた造船業の町・穂屋と船舶国家・アスパシアとの遭遇を断章形式で書いた「悲しみの航海」や、瀬戸内海の架空の島を舞台とした連作短編小説集『湯微島訪問記』（新潮社・一九九〇）といった自身の小説について、中上がその小説のトボスとした紀州の被差別部落『路地』に対抗するべく、

企業城下町のような「他所者ばかり集まつてゐる田舎」で、「歴史的な伝統に遡ることなんてできない場所」をあえて設定した、と述べている¹⁷。また、伊井のデビュー（一九八三年）と、「路地」の解体を書いた中上の小説『地の果て 至上の時』（新潮社・一九八三）の発表とは同時期である。これらを踏まえれば、「歴史的な伝統に遡ることなんてできない場所」しか書き得ないという認識が伊井の活動の出発点にあった、とさえ言い得る。

以上より、これらの伊井の小説を、さしあたり、ガルシア＝マルケスや中上の「サーガ」と呼ばれる二〇世紀小説の継承・解体の試みと位置づけておく¹⁸。伊井の小説において、「他所者ばかり集まつてゐる田舎」を突き詰めたものが「会社」だとすれば、「会社員小説」もまた、その流れを汲むものと考えられる。実際、二つの「会社員小説」では、組織や社員に関する都市伝説めいた神話の生成が書かれている。例えば、社内の謎の配達組織「社内局」の存在や、視点人物の「彼」に関する噂（「さして重要でない一日」、上司の辞表を受け取った部下が代わりにその地位を手にする、という因縁譚「星の見える夜」）が、社員たちのあいだでまことしやかに語られる¹⁹。二つの「会社員小説」には「サーガ」の尻尾が残っているかのようだ。では、「星の見える夜」をこれら一連の伊井の試みのなか

に置き直したとき、どのような独自性を見出せるだろうか。

今一度、小説の本文に立ち返ろう。具体的な記述を重ねる「星の見える夜」では、比較的短い一文を連ね、接続語を減らした文体が用いられている。結果、例えば以下の引用のように、仔細で冗長とも捉えられかねない記述が繰り返される。小説におけるいくつかの行為（テニスの試合におけるボールの当て返し、道に迷うこと、オナニー等）の繰り返しも、そのような冗長さを際立たせることに寄与している。

披露宴の折の残りを夕食にした。鯛をアルミフオイルに包んで温め、つゆをつくり、お茶をいれた。缶ビールを開けて食べ始めた。TVの天気予報は明日も雨だと言った。後片付けはいつもより簡単だった。昨日の朝のコーヒーを温め直して飲んだ。時間が不規則に流れている気がした。立ち上がって何かしようとする、時間がどんどん流れ出す。座布団に座っていると、時間は立ち止まってしまったかと思えるほどゆっくりしか動かない。日曜日の夜だった。休日の時間に平日の時間が混じり合っているのだと思った。明日は来てほしくなかった。しかし、何もすることがない時間は苦痛だった。物思いをすることが辛いからだ。いらいらしていた。見たいT

V番組がなかった。本を読むには集中力が欠けていた。レコードをかけても耳の奥にまで届かなかった。ひろは自分とはかけ離れた場所にいる。一方ナカガワに渡された封筒は、明日着ていく予定の上着の内ポケットに収まっていた。それをどうするのか、まだはつきりと決まっていなかった。決めることはできそうになかった。シンは、自分の頭を空っぽの状態に保とうとした。「星の見えない夜」二二四—二二五頁

この書き方は、「創作合評」(『群像』一九九一・三)で、「テレビドラマ的な平明さ」(渡部直己)、「削れるところがたくさんある」(菅野昭正)という冗長さ、社員たちの生活を手細に書くことで「膨らみを自分でそいでいる」(渡部)奥行きのある、といった否定的な言い回しで指摘されている²⁰。無論、これらの特徴は、「会社員」あるいは「ビジネス社会」を捉えるため、意図的に導入されたと考えられる。以下、その内実を二つの観点からまとめておく。

まず、繰り返しになるが、「星の見えない夜」では、ほとんど字義通りにしか読めない記述を積み上げている。そのため、この小説に対して何らかの隠喩を読み込むことは極めて困難である。そして、接続語を減らし、各文を関係性のくびきから解

くことで、それぞれの行動や意識に明確なつながりが無いことが示される。それらを蝶番のごとくつなぎとめるのは、この箇所や冒頭付近のシンの車内の記述等において、後続の文(引用箇所であれば、「シンは、自分の頭を空っぽの状態に保とうとした」)で登場する主語である。

また、「星の見えない夜」では、登場人物の呼称の書き分け方に規則性があり、それが、「彼」と呼ばれる男性社員の視点で書かれた「さして重要でない一日」と同様、女性社員を差別的に扱うものとして機能する。この小説では、登場人物の名前が、男性はカタカナ、女性はひらがなで表記される。作成される子供向けの本のシリーズ名が「ぼうけん図鑑」とひらがなで表記され、女性社員が男性社員から「女の子」と呼ばれることに鑑みれば、この小説の女性社員は「大人」扱いされていないといえる。伊井自身、「会社員小説」では、男性会社員が「自らの優位(正社員という立場において、男性として)に無自覚」(『会社員とは何者か?』一八三頁)な状態を意図的に書いたとしている。以上を踏まえると、「星の見えない夜」の記述は、男性の「会社員」であるシンの視点と、シンをシンと呼ぶ視点、すなわちシンを男性の「会社員」として規定する「会社」の視点とが重なる地点からなされたもの、となる。ただ、この記述が単一の主体性には属さない以上、もはや視点という

言葉も適當ではないだろう。

これらの表現は、常に「休日の時間に平日の時間が混じり合っている」ような「会社員」の生、すなわち、「会社」に取り込まれ、その意識や行動が自分のものかどうか区別ができず、それゆえ、それぞれを一貫したものとする確実な関連付けもできない、という、前節で指摘したその特徴とつながっている。

注目すべきは、「会社員小説」の試みと同時期に、これと似通った変化を通過していた作家がいることである。他ならぬ、伊井が標的とした中上である²¹。

例えば、中上の遺作となった長編小説「異族」(『群像』一九八四・一〜一九九二・一〇、中断有り)である²²。「異族」に對しては、従来から、その文体や物語内容の冗長さや平板さが、先行する中上の小説と異なる特徴として指摘されてきた。本文を以下に引用する。

タツヤは起き出し、ことさら電話に無関心を装って洗面所に入った。洗面所を出てもウガジンは電話から離れていなかった。タツヤは稽古着に着替え、外に出た。砂浜に入る道を歩き出し、夜中、鳴いていた鳥を確かめてみようかと熱帯雨林の林の方に向った。熱帯植物が育成するには、日射しが柔らかすぎるのか、パイヤもバナナも

椰子も丈だけが高く貧弱だった。砂浜のそばのユウナの木だけが大きく枝を広げ、葉を密生させていた。タツヤはユウナの木を見上げ、昨夜、キリキリと鳴いていた鳥をさがした。鳥はどこにもいなかった。青白かった空が次第に明るくなり、くつきりと青く変るのを、タツヤは体そのもので感じている気になりながら、バンガロー専用のビーチだと示すロープを越え、海にせり出した岬状の岩場の方に走った。岩場の手前は砂浜と自然に出来た防風林のような茂みがある。その茂みの中に小道があり、その小道を抜けると、いつか高速艇がついていた浅瀬がある。タツヤは砂浜の端まで走り、休みもしないでまた折り返し始めた。風景は岩場の方から見ると、まるで違った。(『異族』五七九―五八〇頁)

この引用箇所は、「星の見えない夜」と同時期に発表された「完結編」(『群像』一九九一・二〜一〇)の一部である。前田學は東浩紀との対談で、中上が、「異族」の一度目の中断からの再開(一九八八年)以降、当時注目されていた、エイズや「リゾーム」(ドゥルーズⅡガタリ)等の境界攪乱的な概念を取り入れ、文体を平板なものへ変化させたことを指摘している²³。これは丁度、伊井の「会社員小説」の執筆と並行している。こ

の箇所も、「星の見えない夜」と似た平板な記述だが、両者を比べると、「異族」は全体的に、文中に登場する主語の数が多し。これは、登場人物の多さや、彼らの頻繁な空間移動と関係する。

ここで、決定的な「異族」論である、いとうせいこう「平面のサーガ」(『中上健次全集』一二巻所収)を参照しよう。いとうは、この小説の冗長さや平板さが、登場人物たちの垂直的連続性を担保するもの(時空間、言語、血縁等)の水平的分裂をもたらすと指摘する。それを象徴するのが、登場人物たちの頻繁な移動である。これによって「異族」は、ヨクナパトゥーファ(ウィリアム・フォークナー)、マコンド(ガルシア・マルケス)、谷間の村(大江健三郎)、そして中上自身の「路地」等、特定の土地に根差した「サーガ」がもはや成立しないことを告げる。「サーガなきサーガ」である、とされる。いとうは、「近代小説」の出発点にあった坪内逍遙「小説神髓」で否定された、滝沢馬琴「南総里見八犬伝」の文脈が招喚されていること、そして、「路地」から引き続き、天皇制の問題への取り組みがあったことも併せて指摘している。いとうの論に則ると、「異族」は、国民国家における個人の同一性の解体を分裂的表現によって目指したものの、といえる。

ここに至って、伊井の「会社員小説」と、中上の「サーガな

きサーガ」とが、従来の近代的「人間」の表象から離れ、平板な「サーガ」を目指す点において接近するという状況が立ち現れる。両者の類似点から、例えば、中上の「サーガなきサーガ」が展開した先の一つとして、「他所者」Ⅱ「異族」たちの集まる「会社」を書いていた可能性があり、伊井は「会社員小説」でそれを先取りしていた、などと考えることはできるかもしれない。

しかし、二つの小説の類似点と相違点から読み取るべきは、おそらく次の問題提起である。

まず、もし「近代小説」が、「会社」と「会社員」の問題から出発していたならば、それは今日想定されるものと全く異なっていただろう、という仮説。「異族」よりさらに平板な「星の見えない夜」は、その可能性の具体的な提示となる。「会社員小説」が二〇世紀的「サーガ」の継承・解体である、という、本節でここまで用いてきた図式は、実は転倒している。

「会社員小説」では、解体されるべき垂直的連続性を持つ「人間」など、端から前提とされていないのである。あくまで「会社員」の表現を突き詰め、短編とも長編ともつかない長さで終わる「星の見えない夜」と、ひたすらにあらゆる同一性を解体するべく書かれて、未完のままおかれた「異族」との圧倒的な分量差は、両者の決定的な違いを象徴している。

そして、近代的「人間」としての「会社」あるいは「会社員」が見落とされ続けてきた以上、「近代小説」は、はじめから「人間」無き営みだったのではないか、という極めてシニカルな問い。例えば、今日『ポストヒューマン』の問題に取り組んだとされる作品にせよ、『ヒューマン』の土台が無いまゝ、いかにもそれらしいものばかりが積み上げられているにすぎない、とさえいえる。柄谷の「近代文学」観や、中上の「異族」として例外ではないだろう。当時の「会社員小説」（論）の試みは、これら二つの問題提起に至る。

最終的に、「星の见えない夜」という「会社員小説」は、「近代小説」およびそれに対する認識、これらの根本的な倒錯を暴露する。伊井の「会社員小説」と中上の「サーガなきサーガ」、この両者を切り結ぶことで、それは一層明らかにになる。「星の见えない夜」、ひいては「会社員小説」の試みは、一連の伊井の小説においても、「（サーガなき）サーガ」と呼ぶうるもの、すなわち、先行する「サーガ」の前提それ自体を再審に付すものとして、特筆すべき位置を占めている。

おわりに

ここまで「星の见えない夜」の批評性を指摘してきた。だが、

前出の通り、この小説は、「会社」と公共との関係を問うことから、ともすれば後退したと捉えられかねない特徴を示してもいた。「会社」という「人間」は、その外部を同時に思考することで、はじめて十全に捉えることが可能となるはずだ。「星の见えない夜」では、「会社」それ自体の自律性や統一性を問うことから一旦離れたようにも読める。

「星の见えない夜」を最後に、伊井は四半世紀近く、「会社員小説」の本格的な執筆から遠ざかる。これ以降の伊井の小説、例えば、一九九五年に起きた二つの災厄、阪神・淡路大震災と地下鉄サリン事件を明らかに意識した、「服部さんの幸福な日」(『新潮』一九九九・九)や『濁った激流にかかる橋』では、同時代状況に応接しつつ、「会社」や家族、公官庁、マスメディア等を横断する公共性が問題化される。伊井は「会社」を足がかりに、そのような方向へ進むのである。

まとめておこう。「星の见えない夜」では、「近代小説」において抜け落ちていた「会社」「人間」というあり方、そして、その外部としての公共の捉え難さが示される。これが、「星の见えない夜」のアプローチにおける批評性とその限界である。以上が本稿の結論となる。

最後に、その後の「会社員小説」（論）の展開を、ごく簡単に確認しておく。小説のアポリアとしての「会社員」の表現に

行きついた「星の见えない夜」と、後年の「会社員小説」論の内容とのあいだには明確な差異がある。例えば、本稿の冒頭で引用した「会社員小説」の定義では、「仕事の内容は必須の要素ではない」とされていた。この記述は、「星の见えない夜」が、仕事との関係から「会社員」を特徴づけていたことを重視した、本稿の分析と一見矛盾している。

これは、二つの「会社員小説」の執筆当時、「仕事」と関係づけること無しに、「会社」あるいは「会社員」を書けなかったことを意味する。『会社員小説をめぐって』では、二〇〇〇年以降に書かれた長嶋有や津村記久子の小説を、「会社員小説」として論じている。「会社員小説」の定義は、長嶋の「泣かない女はいない」(『文芸』四三号・二〇〇四)の分析を基に、「会社員小説」とは、会社を舞台として、その中に現れる人間のありようを表現する小説のことなのだ(暫定的な定義)(『会社員小説をめぐって』八五頁)とされ、そこから組み上げられている。長嶋や津村の「会社員小説」、あるいは「会社員小説」でなくとも、多くの「会社を舞台にした作品」の登場を可能にした条件について、「一九九〇年代初頭、社会主義圏が崩壊」したことで、「会社」を「資本主義の化身であり、存在自体を悪と考える風潮」が変化し、「キャラクター小説」の隆盛と女性労働者の増加という要素がそこに相俟ったため、とされる

(伊井自身も認めるように、この記述自体は幾つかの問題点を孕むため、十分な検討の余地を残す)。

以上のように、後年の「会社員小説」論では、小説と「会社員」との関係の捉え方が変化している。この変化を前提に、男女の「会社員」を中心人物として、伊井がさらなる試みに取り組んだものが、長編小説「尻尾と心臓」(『群像』二〇一四・七・二〇一五・一、二〇一五・三・一二)である。この小説の具体的考察は別稿を期したい。

注

- 1 「星の见えない夜」の底本は『さして重要でない一日』(講談社文芸庫・二〇一二)所収のものを用いた。なお、初出および単行本(講談社・一九九一)との異同が多いため、それぞれの版も参照した。『会社員小説をめぐって』の底本は単行本版を用いた。
- 2 一連の経緯や同時代言説の詳細は、拙稿『会社員小説』(論)との接続——伊井直行「雷山からの下山」における試み(『国語国文研究』一四八号、二〇一六・三)を参照。本稿の記述と一部重複している。
- 3 「年譜」(『濁った激流にかかる橋』講談社文芸文庫・二〇〇七所収)。
- 4 『会社員とは何者か?』伊井直行著・新しい視点で現代の小説論じる(『日本経済新聞』二〇一二・五・二七)。「会社員小説をめぐって」および「尻尾と心臓」への書評は、悉くこのような見方に則つて

ている。清水良典「あいまいな存在捉え直す——『会社員とは何者

か?』伊井直行著」(共同通信各社配信、二〇一二・五・二四)、佐々木敦『『会社』をめぐるユニークな文学論——伊井直行『会社員

とは何者か?会社員小説をめぐる』(『週刊金曜日』二〇一二・六・一)『『会社員』になることの意味——『尻尾と心臓』伊井直行

著』(『日本経済新聞』二〇一六・七・一四)、陣野俊史「仕事はずっと続く——『尻尾と心臓』(伊井直行著)」(『週刊文春』二〇一六・七・七)、等。

5『近代文学の終り——柄谷行人の現在』(インスクリプト・二〇〇五) 三〇頁。

6 柄谷が「会社」の問題を見過しているのは、『トランスクリティーク——カントとマルクス』(岩波現代文庫・二〇一〇)等に代表されるその著作の多くで、交換(＝消費＝再生産)の観点を重視していることと無関係ではないだろう。『トランスクリティーク』では、株式会社や生産協同組合に資本制の揚棄を認めたカール・マルクスを評価し、最終的に、消費者の協同組合にアソシエーションズムの可能性を見出す。そこには、「会社」および「会社員」であることがそのまま「人間」である、という発想が可能になる余地は無い。

7 政治哲学における「公共性」の議論の文脈をまとめた、齋藤純一『公共性』(岩波書店・二〇〇〇)の記述等を参照した。

8「川村湊対談・新文学の旗手たち(一)」——ファンタジーとリアルの

光と影／伊井直行」(『新刊展望』一九九〇・二)。

9 第二次世界大戦後の「サラリーマン」言説は、田中秀臣『日本型サラリーマンは復活する』(NHKブックス・二〇〇二)、真実一郎『サラリーマン漫画の戦後史』(洋泉社・二〇一〇)、鈴木貴宇「サラリーマン」(『昭和文学研究』二〇一〇・九)等を参照。それ以前はホワイトカラーの不安定な雇用状態を揶揄するニュアンスが強かった。松下浩幸「モダン都市とサラリーマン」(『コレクション・モダン都市文化』三三卷『サラリーマン』、ゆまに書房・二〇〇八所収)。

10 一連の文脈については、尾高邦雄『日本の経営——その神話と現実』(中公新書・一九八四)等を参照した。「日本の経営」システムの原型が形成された時期については、岩尾裕純『天皇制と日本の経営』(大月書店・一九九二)のように、日清戦争(一八九四年)前後にそれを認めるものもある。

11 山之内靖『総力戦体制』(伊豫谷登士翁他編、ちくま学芸文庫・二〇一五)等。

12「サラリーマン」批判における伊井の問題意識は、「会社」における「等しからざること」、すなわち階層性や差別とも関連する。例えば、第二次世界大戦後の企業社会は長らく、女性労働者や非正規雇用労働者を周縁的な存在として位置づけてきた。橋本健二「戦前・戦中・戦後の日本の雇用慣行」(橋本編著『戦後日本社会の誕生』弘文堂・二〇一五所収)。本文で論じたように、「会社員小説」の執筆時

点です。それは意識されている。ここから、「サラリーマン」という言葉が「会社」内の階層性を覆い隠してしまう、という問題意識もうかがえる。

13 千野帽子「誰が少年探偵団を殺そうと。第二回・ミステリをミステリと知って読むのは最大のネタバレである」(『ミステリマガジン』二〇〇八・八)。

14 「伊井直行氏と語る」(「ほら貝・加藤弘一ウェブサイト」、インタヴューの日付は一九九六・一・一六 <http://www.horagai.com/www/int/int003.htm>)。

15 「川村湊対談・新文学の旗手たち(一)」伊井は「会社員小説」の試みと同時期に、「材木座海岸」(『中央公論文藝特集』一九九一・春季号)「スキーに行こう」(『群像』一九九一・一〇)等、出来事の「正確」な表現を試みた短篇小説を発表している。「初出誌に関する記述を含む前書き」(伊井直行「愛と癒しと殺人に欠けた小説集」講談社・二〇〇六所収)。

16 詳細は拙稿「アクシデント性」動物性、そして『サーガなきサーガ』へ——伊井直行『草のかんむり』論」(『層——映像と表現』vol.10、ゆまに書房・二〇一八)参照。本稿の記述と一部重複している。

17 「伊井直行・物語の触媒としての島へ——『湯微島訪問記』をめぐる」(『ブックガイド・マガジン』三号、一九九〇・一二)。

18 「アクシデント性」動物性、そして『サーガなきサーガ』へ」。

19 この特徴は、「会社員小説」に先行する伊井の小説でも顕著である。

「パパの伝説」(『群像』一九八四・二)や「悲しみの航海」、『湯微島訪問記』では、家族や国家、島等にもつわる噂が、それらの起源を捏造する。

20 このような特徴は、「星の见えない夜」の前作にあたる「雷山からの下山」(『新潮』一九九〇・五)でも認められる。詳細は『会社員小説』(論)との接続」を参照。

21 「生産する小説」(『読売新聞』一九九二・九・二)という伊井の文章でも、「会社員小説」の執筆時に中上の小説を強く意識していたことが示唆されている。

22 「異族」の底本は『中上健次全集』第二巻(集英社・一九九六)所収のものを用了。

23 「父殺しの喪失、母萌えの過剰——フラットな世界で中上健次を読む」(『ユリイカ』二〇〇八・一〇)。近い特徴を持つ同時期中上の小説に、「讃歌」(『文学界』一九八七・七〜一九八九・一〇)がある。「讃歌」については、山田夏樹『ロボットと日本——近現代文学、戦後マンガにおける人工的身体の表象分析』(立教大学出版会・二〇一三)等も参照。